

「広島原爆の日に」 (2018.8.6)

1994年、広島アジア競技大会が開催されました。カンボジア政府が資金難のために選手を日本に送り出すことが困難であることを知った広島県民が、選手招聘の支援をしました。このことがきっかけとなり、広島県とカンボジア交流が始まり「ひろしまハウス」が設立されました。ここでは家庭環境や経済の貧困さから、学校に通うことができなかつたり、公立の学校に定着できなかつたりする子ども達が約50名学んでいます。

今回の東南アジアツアーの目的の第一はこの「ひろしまハウス」の訪問でした。

愛知県のパチンコ店「APAN21」「RAINBOW」を運営する「(株)遊都」の都築会長から託された「菓子」をお届けしました。子ども達はとても礼儀正しく「おはようございます」と笑顔で迎えてくれました。

「広島原爆の日」に広島県民の心意気に出会えました。これから「ひろしまハウス」ともつながりを持っていきます。



子ども達は目の前の沢山のお菓子に目を輝かせながら、礼儀正しく日本語で「ありがとうございます」と受け取っていました。友だち同士、交換し合ったり、私たちに「おすそわけ」してくれたり。後半は「フライングディスク」競技で楽しみました。

「足るを知る」

カンボジアプノンペンの家庭環境が恵まれない子ども達に教育の機会を無償で提供している「ひろしまハウス」。子ども達の礼儀正しさもさることながら、学用品を大切に扱う姿勢に感心させられました。どの子ども達のノートを見てもとても丁寧な字が書かれていました。靴も整然と並べられていました。恵まれた日本人の子ども達が忘れかけている「こころ」がここにはありました。

カンボジアの小学校、中学校の公教育は、基本的に無償で提供されています。しかし、教師に対する、「賄賂」の習慣も残っており、成績や席順や進級が操作されていることも珍しくありません。カンボジア語、算数、社会と科目も少なく、一日3時間と、授業時間も短いため、「学校=つまらないところ」という図式ができています。造形や音楽といった「感性」に関わる教育は実施されていません。貧困層の家庭では小学校に行かせる重要性を感じていない傾向にあります。

海外からの影響が強いカンボジアでは、多くの言語数を喋れたりすることや、ビジネスマナーを学ぶことが大切だという意識は強くなっています。

「ひろしまハウス」で学ぶ子ども達は、自分達の苦しい生活の中でも一縷の望みをかけて「ひろしまハウス」に来ています。



カンボジア一部プロサッカー選手 友廣 壮希(左写真中央)

彼はカンボジアの恵まれない子ども達に無償で食事と教育の機会を提供している「ひろしまハウス」のゼネラルマネージャーを務めています。

教育を受けることで、社会的に自立するたくましい「生きる力」を身につけて、「貧困のスパイラルから抜け出させたい」と熱く語っていました。東南アジアで開催しているスポーツと造形遊びを行うアートキャラバン「フライングディスク教室」をここカンボジアプノンペンの「ひろしまハウス」で今年12月に開催することにしました。

